〔書評〕

村田裕和著『近代思想社と大正期ナショナリズムの時代』

大和田　茂

あれは安成貞雄の没後八〇年を記念して彼の足跡と業績をまとめた『安成貞雄その人と仕事』（不二出版）が刊行された年の二〇〇四年、命日にあたる七月二三日、戦後初めてといわれる「トマト忌」（赤ら丸顔に由来するニックネーム）の集会（東京・本郷）に参加したときであった。安成を研究されている立命館大大学院生の村田さんを紹介されて、同時代の文学研究を多少やっている私は「これはお珍しい」と思いつつ、安成については通り一遍の知識しかもちあわせていないこともあり、残念ながら二言三言ことばを交わしただけであったかと記憶している。

それから七年後、昨年の東日本大震災発生の直後（あるいはほぼ同時に？）に本書が刊行され、再び村田氏の名とその広範囲にわたるお仕事振りを目の当たりにすることになったのである。

書名のように扱っている時代は、雑誌『近代思想』の時代とその前後（主に一九一〇年代）であり、大杉栄たち近代思想社の人々と、それに対峙した「ナショナリズム」の流れに組するとされる人々にまつわる文学・文化状況が主に論じられているといっていいだろう。そして、その両者のキーマンのひとりがかの安成貞雄なのである。

書名に「近代思想社」とした意図は、「まえがき」にもあるように、雑誌『近代思想』そのものを扱うのでも、大杉ひとりを中心化するのでもなく、同誌に登場したりすれちがったりした様々な人々の仕事を通して「同時代の「文学」を眺めてみたい」ということにある。また「大正期ナショナリズム」とは、著者も言うように一見認知しにくい命名であるが、明治・昭和とは異なる民族主義・日本主義の流れ、ことに「文化ナショナリズム」としてとらえて、近代思想社側との「論争」や大杉・安成・荒畑寒村たちのそれらへの「介入」を通じて、文化・文学的にあぶりだしていこうというものであり、この部分について私は、とくにスリリングに読ませていただき、教えられるところが大いにあったといわねばならない。

雑誌『近代思想』は周知のように、大逆事件後の「冬の時代」の逼塞状況を打破するために、大杉と荒畑がほかの社会主義者に先駆けて、第一歩を踏み出した雑誌である。といっても社会主義的言説がそのままに許される状況でもなく、検閲がオピニオン誌よりはゆるく保証金も不要なため、学術・文芸に限られた雑誌を彼らは出さざるを得なかった。これを著者は「文学的」な「偏向」を強いられたゆえの、一種の「文学的」な「現象」と見て、大杉たちの側からではなく文化・文学の状況的視点に立って相対的に考察しようというのである。つまり、大杉たちは限定的に文学の場に立ち行動したのであるが、その「行動」とは文学という磁場を主戦場に、「革命」を前提にした「論争」「介入」であったというわけであろう。

冒頭の論文「序説　近代思想社の〈思想圏〉―民衆芸術の方へ」（書き下ろし）は、総論的な位置にあり、一面「大正社会主義文学（あるいは大正社会文学）論」の様相を呈している。大まかに言えば、大杉らはその時々の芸術テーマやイデオロギー、すなわち自然主義論、「郷土ロマン主義」（地方主義）、遊蕩文学論、民衆芸術論、伝統主義などを俎上にあげ、主に『早稲田文学』の自然主義文学者たち（島村抱月・土岐哀果・相馬御風・本間久雄たち）における「実行と芸術」の問題を顕在化させて「芸術か戦闘か」の二者択一を迫ったり、階級的意味を問うたりして、深く「倫理」の問題にまで迫った。著者は「近代思想社の存在は、大逆事件以後の反動の十年間に、「文学」と「芸術」の領域を揺さぶり、言説空間に複数の亀裂を走らせた。そして、まさにそのことを通して、人々の「人間的要求」にとっての根源的な足場の名が、「文学」であり、「芸術」でなければならないことを証明したのである」と結論づける。

この総論のあとに各論というべき諸論文が配される。そのタイトルを示せば、「文化的空間としての〈自然〉」（島村抱月論）「ローカル・カラー、生命、公衆」（「生の芸術論争」論）「大杉栄の批評の実践性について」「漂泊する知識人の自画像」（安成貞雄論）「他郷の戦争、不可視の戦場」（第一次世界大戦と文学論）「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争」「告白と故国の言説空間」（島崎藤村論）「逆徒の『名』」（管野須賀子論）と並ぶ。

ただ、総論における近代思想社の「介入」や「論争」と直接リンクした論文は、「大杉栄の批評の実践性について」「漂泊する知識人の自画像」「仏蘭西学会の設立と伝統主義論争」の三本であり、ほかの五本は必ずしも総論に対応した各論にはなっていない。むろん大杉や安成が対峙した同時代のナショナリズム、保守主義の問題を扱った前提となる論文群ではある。「気の向いたページから開いていただければ幸いである」（「まえがき」）とあるように、本書は一方では広い意味での「大正文化論」集的性格ももっている。

「文化的空間としての〈自然〉―島村抱月の自然主義論を中心に」は、抱月の「囚はれたる文芸」にはじまる早稲田派の自然主義論に関して、国民国家としての「文明の確立」（「ナショナリテ

ィ」）のために課せられた文芸の使命を論じている。そしてその目的とは「物我融会」（自然への主観投入）による「自然、物質、現実を「大胆に暴露」すること」だという。これが、安成を含む抱月の弟子たちに影響し、郷土・地方を主体の存立空間と位置づけた相馬御風などに通じる「郷土ロマン主義」の前提として論じられているのであるが、御風についての独立論文は本書には見出されない。

あとにつづくのが「ローカル・カラー、生命、公衆」で、石井柏亭と高村光太郎らとの「生の論争」を取り上げ、絵画における地方主義の問題が提出されるが、そこに御風の近代科学文明批判を含んだ自然主義論の簡単な紹介を見るものの、総論の中にある自然主義的観照論を乗り越え、大杉との「実行」をめぐる論争後、地方における民衆の生活世界に依拠しながら反近代的な「郷土ロマン」主義者に変容する御風についての本格的な論述がほしかった。

そうは言っても、『近代思想』と自然主義派とのせめぎあいは本書の随所に散見されるのだが、「大杉栄の批評の実践性について」では、「近代思想社小集」を焦点化し、第三回小集に島村抱月と相馬御風を招いたことの意味を問うている。抱月は「文芸の第一義として、所謂静かなる観照と美のエクスタシーを重んじ」、それに対抗して大杉がすばやく「憎悪美と反逆美の創造的文芸」を主張、抱月も「観照」と「実行」の二元論から「実行に伴う観照がある」という一元論に転向したという指摘は、目を開かされる思いがする。さらに大杉の筆鋒は、早稲田派の領袖坪内逍遙にまで向かい、逍遙のイプセン理解の道徳性を鋭く批判した点が指摘されている。逍遙は別にして、大杉らと早稲田派の文学者との橋渡しをしたのが、早稲田出身の安成や白柳秀湖であったということも、今回改めて再認識したところである。

「漂泊する知識人の自画像――安成貞雄と実業の時代」は、安成の生涯の素描であり、同時に彼の本質に鋭く迫る内容でもある。鉱山労働者を父に持ち「コスモポリタンの空気」につつまれた労働者の共同体を転々とした「漂泊児」に己を重ねる安成に著者は着目し、「伝統的な農村共同体を「故郷」とする心情の上に成り立つナショナリズム」とは対極にある彼の漂泊の身体性を指標としている。そしてそれは自ずから「文化ナショナリズム」とは遠いところに位置し、安成がまず批判の矢を放ったのが新渡戸稲造に代表される、国民性論流行の中に現れた「武士道」であった。

同時代、志賀直哉の小説「清兵衛と瓢箪」（一九一三年）にも武士道を鼓吹する小学校教師が登場し自由な創造にいそしむ清兵衛を圧迫するという問題が扱われ、また今日でも「作法」を日本人が見失ったという言説の下に、新渡戸の『武士道』がもてはやされる一面がある。安成は「武士道は一般的徳目を編集したものに過ぎず」ものめずらしさが目立つだけだという。一方では実は『実業の世界』の記者（主筆）安成がライバル誌攻撃の「ネガティブ・キャンペーン」の一環として行った新渡戸批判はここにとどまらず、著者によれば「近代オリエンタリズムのまなざしが交

又する中で合成された商業道徳＝武士道」が、「時代と呼応しながら、変貌を遂げ、「産業資本確立期」以後、国体への「至誠至忠」という国民支配の中心的イデオロギーとして採用されたのも必然的ななりゆき」として接続し、その後の日本にもその有効性を発揮したというのである。

このような歴史的連続性への指摘は、「大正期ナショナリズム」の諸表象やイデオロギーが、やがては一九三〇年代初めからはじまる戦時体制構築への文化的役割を果たすことを示しており、一般に「大正デモクラシー」の主流に隠れ、これまで注視されなかったナショナリズムの小流群ではあったが、本書は新たにそのことに強く思いを至らせてくれる。

安成の「介入」はむろんこれにはとどまらず、この時期の文芸誌に頻繁に登場する岩野泡鳴と三井甲之という日本主義（国家主義）者や、第一次世界大戦期の愛国的フランス文学者に影響された太宰施門ら仏蘭西学会との「伝統主義論争」や民衆芸術による労働者教化を説いた本間久雄への批判など、安成の文芸上の行動は実に果敢であったことがあとづけされている。そこには彼の「科学的精神」の発露による「プロレタリアートの潜在的な声を代弁し、階級的自覚と知識人の倫理的使命にもとづいて「階級闘争」にしたが」うことを強く求めた結果だという指摘も首肯できる。古くは土田杏村がもっとも尊敬する「最初の無産者評論家」だと追悼している（一九二四年）が、著者はそれを敷衍して「明治期初期社会主義とプロレタリア文学を架橋した」人物という新たな位置づけをしている。

『近代思想』の人々と文学者各人との個別論争や批評活動は、これまで検討されたことはあったが、「「近代思想社」というフィルターを通して」（「まえがき」）当時の文壇・文化状況を遠近画法的（パースペクティブ）に見据える検証方法は、実に新鮮であった。

（双文社出版　二〇一一年三月一四日　A5判二五四頁　本体価格三八〇〇円）

（おおわだ・しげる　法政大学非常勤講師）